使徒の働き1章1－8節 「復活の後に」

1A イエスの行いと教え 1－2
2A 復活後の神の国 3－8
1B 数多くの確かな証拠 3a
2B 神の国の福音 3b
3B 父の約束 4－5
1C 御霊の注ぎ 4
2C 聖霊によるバプテスマ 5
4B イスラエルの再興 6－7
3A 聖霊の約束 8

本文

私たちは、これから使徒の働きを学んでいきます。今、礼拝においては黙示録を学び、またこの水曜日の学びでは、これまでイザヤの預言を学びました。終わりの日についての学びです。そこで、私は思いました。「終わりの日に向けた証しは、教会に任せられている」ということです。今年の、私たちの教会に与えられたと示されたみことばも、「シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために沈黙はしない。その義が明るく光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。（イザヤ 62:1）」でありました。主が来られて救いが完成する時まで、私たちは証しをやめない、ということです。

それで、証しの力を与える聖霊の働き、教会を通しての働きを知るのは、使徒の働きを学ぶのは最適です。彼らは、主が今にでも来られることを信じて、聖霊の力によって証しをしています。私たちも、その聖霊の働きに自分たちの身を任せていきましょう。

1A イエスの行いと教え 1－2
[1]テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。

「前の書」というのは、ルカによる福音書です。使徒の働きは、ルカの福音書の続編になります。ルカは、コロサイ 4 章 14 節によると、「愛する医者のルカ」とあり、医者です。そして、パウロによる第二次宣教旅行に、途中で参加しています。使徒の働き 16 章 10 節で、パウロがマケドニア人の「助けてください」という懇願を幻の中で見たので、「私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。」とあります。それまでは、パウロについては「彼」、テモテやシラスがいれば「彼ら」となっていましたが、トロアスから船出をする時は「私たち」となっています。この時からルカは、パウロの宣

教チームに加わっていました。

話を戻しますと、ルカは、「テオフィロ」という人のために、この書を書いていることが分かります。ルカは、テオフィロという有力者に医者として彼に仕えていたのかもしれません。ローマでは、医者は奴隷の身分でした。そして、テオフィロが信仰を持って、ルカが医者らしい、綿密な調査で福音書を書いていったと考えられます。冒頭をお読みします。「1:1-4 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。」これまで、伝聞として聞いてきたものを、しっかりと調査して、順序立てて記録することで、自分たちの信じていることを確かめる目的のようです。

そして使徒の働きでは、「イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました」とあります。ここの文面には、主イエスが行い、教え始められたとあり、まだ完了していない意味合いが含まれています。つまり、使徒の働きにおいて、主のお働きは継続していく、ということを示しています。ここが、聖霊による働きです。聖霊によって、主イエスが今も生きて、私たちと共にいて、働かれていることを証言していくのです。

2 それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。

ルカによる福音書の最後の部分を指しています。そこの部分を読んでみましょう。よみがえられた後に、弟子たちと食事をされました。その後に言われた言葉です。「ルカ 24:44-49 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46 こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して、48 あなたがたは、これらのことの証人となります。49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」」

主が、ご自身が苦しみを受け、栄光に入ることについて、まず聖書全体から説き明かされました。そして、ご自身が死なれ、よみがえられ、ご自身の名によって、罪の赦しを得させる悔い改めを説くこと、しかも、あらゆる国民に宣べ伝えることを教えています。それから、証人になると教えておられます。そのために、力が与えられます。それが、「わたしの父が約束されたもの」と言われている

わけです。

その父の約束というのは、終わりの日に御霊が注がれることです。ヨエルの預言 2 章 28 節からです。「2:28-32 その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。29 その日わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ。30 わたしは天と地に、しるしを現れさせる。それは血と火と煙の柱。31 【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。32 しかし、【主】の御名を呼び求める者はみな救われる。」

主は、ご自分が戻ってこられる時に、ここにあるように世界に災いをもたらし、裁きを行われます。しかし、前もって、すべての人々に御霊を注がれるのです。そのことによって、一人一人が救われ、また救われるだけでなく、預言を語り、夢を見るなどして、主の証しを立てることになるのです。主が終わりにおいて、ご自身の御霊の著しいお働きをされることが、預言者によって証しされています。このことを基にして、主はヨハネの福音書において、何度となく、助け主の約束をされました。「ヨハ 14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。」

そして、「天に上げられた日までのことまで」と言っていますが、ルカ 24 章の続きはこうなっています。「24:50-53 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。」主が、エルサレムに留まっていなさいと命じられていたので、そうしていたのです。今の、もうひとりの助け主と主が言われたように、主が天に昇られてからも、聖霊によって、まさに、生きた主が共に私たちといてくださり、同じように生きて働いてくださる、ということです。

2A 復活後の神の国 3－8

そして 3 節から 8 節まで、主がよみがえられて天に上られるまでの出来事が書かれています。ここで、聖霊の力が与えられ、主の証しをするとことになるという、主のことばがあります。

1B 数多くの確かな証拠 3a

3a イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

主が、十字架で苦しみを受けられた後、よみがえられて、ご自分が生きておられることを示されました。「数多くの確かな証拠をもって」とあります。申命記には、二人、三人の証言をもって事実と認められるということが書かれています。二人、三人だけではなく、数多くの人が、この方が生きて

おられることを見ました。福音書によれば、マグダラのマリアが初めに見ました。次に墓のところに来た女たちです。ペテロに、よみがえられた主を見ています。そして、エマオの村に歩いていた二人の弟子も見ました。そして、弟子たちの間に現れたのです。そこでは、幽霊ではないことを示すために、ともに食事をされました。そして、トマスがその場にいなかったので、後日、再び現れました。彼は、自分の指で、手足の刺された穴、槍で付かれた脇腹を確かめなければ信じないということだったので、主は、指を入れて見なさいと言われました。

それから、パウロがコリント第一 15 章で、他の人たちも見たことを話しています。6 節から読みます、「6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。」主の兄弟ヤコブにも現れました。そして、十二人の他にも使徒と呼ばれる者たちに現れました。最後に、自分がダマスコに行く途上で、よみがえりの主に会ったことを証言しています。

このようにして、よみがえりの主に会ったことによって、彼らが変えられたというところに、証しの力があります。ペテロは、その典型的な例です。カヤパ邸に行った時に、下女が彼に「あなたは、あの人の仲間でしょう？」と言われた時に、三回、知らないと否定しました。けれども、今度は、サンヘドリンにおいて、まさに同じユダヤ人指導者たちがいるところで、大胆に宣言しました。「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

このようにして、よみがえりの主に会ったということが、彼らを力強い証し人にしたのです。私たちに必要なのは、いわゆる、正しい教えを知的に習得するとか、教会に忠実に通うとか、そういった表面的なことではありません。自分の罪のために死なれ、三日目によみがえられた主に、お会いしているかどうか？ということです。そして、よみがえられた主に会うのは、聖霊のお働きなのです。

2B 神の国の福音 3b

3b 四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

よみがえられて、神の国のことを語られました。福音というのは、「御国の福音」であると、マタイの福音書などに書かれています。そもそも、聖書は、神の国のことを教えています。神が王であり、主権者であり、造られた者はこの方に服するということです。神が天地を造られ、これらを支配しておられます。そして、アダムが罪を犯して、サタンが支配よるようになりましたが、神は、罪の赦しによる贖いによって、これをご自分のものに取り戻されます。まず、イスラエルをお立てになりました。ご自身が主であり王である民と国を造られました。そして、その御国は、イスラエルの民だけ

でなく、異邦人にも及びました。教会は、キリストのからだと呼ばれ、この方をかしらとしています。

ここが大事です、「よみがえりの主に私たちが会うと、私たちはこの方が主であり王であることを知る」ということです。この方にひれ伏します。私たちが新しく生まれ、そのよみがえりの力を知ります。そして、よみがえりの力を知れば、私たちは神の国にふれるのです。

そして、主が地上に来られた時のことを思い出してください。先駆者であるバプテスマのヨハネは、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と宣べ伝えました（マタイ 3:2）。それから主ご自身が、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と言っています（4:17）。悔い改めることで、御国に入れるのです。主は、バプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のようにして降りて来られましたが、その聖霊の力で、数ある大いなるわざを行われました。そこに御国が来ているのです。

そして、よみがえりがあることは、終わりの日の御国の確立にもつながります。主がよみがえられ、人々がよみがえり、そして、よみがえった者たちが神の国を受け継ぐのです。ダニエルが預言していました。「12:1-3 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。」

キリストがよみがえられた、ということは、すでに復活が始まっているのであり、これは神の国の始まりであるということの兆しなのです。コリント第一 15 章には、キリストが初穂としてよみがえられ、それから信者がよみがえり、それからすべて、万物が新たにされるとあります。

そして「四十日にわたって」というのは、イスラエルの荒野の旅の四十年を思います。その時、彼らは主がおられるのに、不信の罪を犯しました。よみがえられた後の弟子たちも、そのよみがえりを信じるまで時間がかかりました。そこで主は、復活したことを信じるのに四十日を費やし、同じ過ちを犯さないようにされたのではないかと思います。

<u>3B 父の約束 4－5</u>

<u>1C 御霊の注ぎ 4</u>

4 使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

ここの「一緒にいるとき」というのは、「塩を一緒に食べている時」という意味になります。一緒に食事をしている時です。それからエルサレムを離れないで、父の約束を待ちなさいといわれます。

なぜ、エルサレムを離れないのか？それは、福音はエルサレムから始まるからです。「イザ 52:7 良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあって、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神は王であられる」とシオンに言う人の足は。」シオンに良い知らせが告げられ、神が王であること、つまり神の国を宣言します。

2C 聖霊によるバプテスマ 5

5 ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」

ヨハネが、主が来られる前に、ユダヤ人たちに現れて、道備えをしました。それは、イザヤが預言したように、「40:3-5 荒野で叫ぶ者の声がする。「【主】の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。このようにして【主】の栄光が現されると、すべての肉なる者がともにこれを見る。まことに【主】の御口が語られる。」」大路をまっすぐにするというのは、悔い改めることです。人々が悔い改め、へりくだり、それで主の栄光を見ます。

それで、ヨハネは、水のバプテスマをさずけました。悔い改めを、身をもって示すために、水に浸かります。そして、来る神のさばきから免れるようにします。しかし、主ご自身が来られる時は、聖霊のバプテスマを授けると言いました。「ルカ 3:16-17 私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

ヨハネは、聖霊と火でバプテスマを授けると言っています。これは、聖霊のバプテスマを与えられ、それから神の火による裁きが来るということです。後に、聖霊のバプテスマを受けたペテロが、ヨエルの預言を取り上げて、御霊が注がれて、それから天地に災いが来るということを話しました。だから、悔い改めて罪を拭い去っていただき、バプテスマを受けなさいと勧めました。「この曲がった時代から救われなさい。（3:40）」と勧めました。

4B イスラエルの再興 6－7

6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

使徒たちが、このような質問をするのは無理もありません。キリストのよみがえりは、まさに終わりの日の御国の到来の現れです。先にダニエル 12 章の預言を見た通りです。そして、聖霊が注

がれることも、その後で患難があり、それでイスラエルが救われるのです。だから、いつ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか？と尋ねています。神の国が来るということは、主がイスラエルを建て直すことです。預言者たちは、数知れずイスラエルの回復を語っていました。

7 イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

そうです、終わりの日において私たちが受ける葛藤は、使徒たちと同じように、このように明らかに預言が完成されつつあることを感じて、では一体どうなるのですか？ということなのです。けれども、それを決めるのは父なる神ご自身なのです。主がオリーブ山で、こう語られましたね。「マタ 24:36 その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

御使いも、なんと子も知らないと言われます。ご自身も知らないのです。これは、ユダヤ人たちの婚礼に関わることです。主は、ヨハネ 14 章で、こう言われました。「14:2-3a わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」主が来られることについて、ユダヤ人の婚礼を知ることは大事です。花婿は、自分が妻と一つになるための家を、父の家を改築して、一つ部屋を造って備えます。そして、花嫁を引き取りに行きます。婚礼を父の家でするのに、すべてが整えられています。ところが、花嫁のところに行く時を定めているのは、父なのです。夜にいつか待っていますが、父が息子に「この時だ」と言います。それで息子は向かい、同じく用意して待っている花嫁を引き取りに行きます。

このように父の権威に任されています。私たちは、神のご計画について、その完成が近づけばそれだけ、いつなのか？と、知りたいとじれったくなります。しかし、それは父なる神が定めておられることであり、私たちには他にしなければいけないことがあるのです。

3A 聖霊の約束 8

8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

聖霊が臨み、それから力を受けて、そしてエルサレムから始まって、地の果てに至るまで、イエスの証人となるのです。次回、8 節だけにしぼって、聖霊のバプテスマと、この力について学んでいきたいと思います。ここでは、主が、神の国の到来において、エルサレムから始まって、地の果てまで、神が王であるという良き知らせを証しすることを教えておられることに注目しましょう。

イザヤ書を私たちは読み終えましたが、そこに数多く書かれていました。ここでは「地の果て」でありますが、イザヤの預言では「島々」が鍵となる言葉です。「イザ 42:4 衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」「42:10 新しい歌を【主】に歌え。その栄誉を、地の果てから。海に下る者、そこを渡るすべての者、島々とそこに住む者よ。」「イザ 51:5 わたしの義は近く、わたしの救いは現れた。わたしの腕は諸国の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に期待をかける。」「イザ 60:9 まことに、島々はわたしを待ち望み、タルシシュの船は真っ先に、あなたの子らを遠くから運んで来る。彼らの銀と金とともに。それは、あなたの神、【主】の名のため、イスラエルの聖なる者のためであり、主があなたを輝かせたからである。「66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのうわさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。」

これだけ、たくさんあります。詩篇も、他の預言者も、諸国という言葉を使ったりして、すべての人が主を神としてあがめるという、その究極の目的を指し示しています。元々、イスラエルの父であるアブラハムに対して、「創世 12:3 地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」とありますから。ですから、ずっと後に、ペテロや他のユダヤ人信者たちは、コルネリウス一家に聖霊が降った時に、非常に驚いたとありますね。それは、異邦人に聖霊が降るということは、まさに、諸国に対する神の働きかけ、救いの完成を見たからです。これこそ、終わりの日のしるしなのです。

異邦人が救われるということは、ここには、一種の「信じられない」というものがあります。パウロがエペソ 2 章で言っていますが、「2:11-12 ですから、思い出してください。あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。人の手で肉に施された、いわゆる「割礼」を持つ人々からは、無割礼の者と呼ばれ、そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。」遠く、離れた人々なのです。だから、普通で考えたら「無理でしょ？」という人々なのです。

私たちは、そうやって救われたのです。神の恵みによって救われました。隔ての壁が壊されていて、キリストにあって救われたのです。ですから、聖霊の力が必要です。イエスの証しを立てるのに、自分自身ではどうしようもできません。キリストが生きておられることを、自分の歩みを通して見せるのです。そこのは、歪みというか、ロマ 11 章の喩えを使えば、野生種のオリーブの枝を、栽培種のオリーブの木に接ぐのです。これはどだい、無理な話なのです。それを可能にするのが、聖霊さまであります。